

# 兵庫県南部地震の被害から、復旧へと立ち向かった人々の記録

## “1月17日”という長い1日

これは、阪神高速道路公団(当時)の社内報(平成7年3月号)に職員が寄稿した手記を引用・編集したものです。

### 「7人とも床に転がった」

1月16日、休日の昼食時。私のもっとも嫌いな事務所から「出勤せよ」との電話があり、急ぎの書類作成のために所長以下徹夜で取り組んでいた。思い返せば、これが私の震災応急対策勤務の始まりであった。17日午前5時半ごろ、会議室で最後の書類確認をすべく椅子に座った瞬間、ドンという大音響とともに体が浮いた感じで、マスの中の炒り豆のように7人が床に転がった。「揺り戻しがあるぞ」と誰かが叫び、そのまま床に座り込んだまま、第二波を迎えたが、その恐怖のほうが大きかった。



建物の非常用サイレンが鳴り、事務所の机やロッカー類が散乱した中、一瞬の静けさが訪れた。手にケガをした所長以下の一団が、9階から階段を飛ばすように降り、1階フロアから庁舎外へ。

### 「高速道路がゆがんで見えた」

点検は、京橋から西が副所長、東が私に割り当てられた。指令台の機能がマヒしているため、連絡方法は黄・赤による常備されている携帯無線機だ。自転車でまたがり庁舎を出た途端、ハーバーランド付近の高速道路がゆがんで見え、最初のショックを受ける。税関前の交差点では、ローラー支承のローラーが路上に散乱、支承の残骸を拾い集め、無線で連絡。コンクリート脚の柱基部座留を発見、連絡して野帳に記入する。浜手幹線上に散乱する支承の残骸の集積作業はあきらめ、先へ進む。

### 「ビルツ倒壊現場であら」

深江のビルツ倒壊現場では、信じられない光景にあ然とさせられた。倒壊した橋梁にはさまれた大型トラック、バスを目撃する。警官らが懸命の救出作業中だった。任務とはいえ、複雑な心境で先へ急ぐ。国道43号では、緊急車の他にも路面の段差を乗り越えて一般車の往来が目立つようになる。

### 「急ぎ帰社せよ」の無線

武庫川歩道専用橋を越えると、目視出来る被害は極端に少なくなり、元気を回復して尼崎東に向かう。途中、結果を本社に報告するため帰社するよう無線が入った。早朝から自分一人の判断で調査を進めていたが、報告が待たれていることを認識し、尼崎営業所を折り返し点に、帰路は下り線を足早に調査、帰ることに専念する。この時、43号の起伏の多さ、沿道の報道陣の多さに気づきながら自転車のペダルを漕ぐ。京橋の庁舎に到着した時は、出発した時と同じくらい薄闇となり、夕暮れが迫っていた。

### 「再び現場へ」

次に命じられたのは、JR鷹取高架橋の損傷現場での現場確認であり、今回は黄・赤による出勤。長田付近ではまだ火災が続いており、交差点に入るたびに一人が降りて赤色棒で誘導しながら進む。夜空を焦がす火炎と点滅する緊急車両の赤色灯のみが、印象に残っている。翌日からは、ビルツ現場への出勤が決まったが、この日、何時に休息したか、記憶が定かでない。私の人生の中で、最も長い一日であった。

### 野帳

震災直後に自転車で高速道路の点検に回り、橋脚や橋桁などの被災状況を記しました。

## それぞれの大地震災

これは、「大震災を乗り越えて 一震災復旧工事誌 阪神高速道路公団」の寄稿文から、引用・編集したものです。

### 「応急復旧時苦労したこと」

(株)鴻池組(震災時) 西畑 章

震災直後の応急復旧工事で何を苦労したかといえば、工事はもちろん、食料・水・自動車・バイクなどの確保に、通常の工事とは比較にならない苦労をしました。当社の場合、神戸の災害復旧対策本部へは、大阪本店から職員を応援するとともに、大阪から1日2便、トラックで、弁当・水・缶詰・下着などを運搬しました。職員だけでなく現場作業員にも弁当を配給し、夜間工事で冷え切った体を暖めてもらいつつ、食事、休憩をとってもらいました。



### 「震災直後からの補修基地の対応」

スバル興業(株)(震災時) 竹田 秀光

基地業者の職員は、常日頃から台風・大雨・凍結・交通事故による通行止など、何かあれば出勤し、家族にとって家に居て欲しい時も会社に行かなければなりません。今回の地震では、当社の社員や家族はたまたま誰も負傷しなかったから良かったものの、自宅が全・半壊した者も、自分のことはさておき、復旧に参加し、寝る暇も惜しんで働いてくれました。



### 「簡単に総括できぬ623日」

神戸線復旧建設部工事課長(復旧時) 幸 和範  
当時は全員が、責任感と緊張と恐怖のなかで、緊急輸送路確保という目標に全身全霊を注ぎ突き進んでいた。緊急対策が終了した2月10日に復旧第3班に引継ぎを行った。やっと開放されるという安堵感を覚えながらも、これからの苦闘を思うと、彼らにかけるべき言葉が見つからなかった。5月16日に復旧建設部工事課長としてその戦列に参加するとは露知らず、平成8年9月30日正午の全線開通は、某ラジオ局のスタジオでインタビューを受けながら迎えた。マスコミ各社の賞賛の報道のなかで、この623日はそう簡単に総括できるものではないんやで、と独り言を言っている自分があつた。